

一般国道319号善通寺バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

京 免 遺 跡

1988年12月

香 川 県 教 育 委 員 会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は、一般国道319号普通寺バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書であり、普通寺市与北町と原田町を中心として所在する京免遺跡の発掘調査報告を収録した。
2. 本調査は、香川県教育委員会が建設省から受託し、委員会の指導のもとに御香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は、1988年7月1日から同年8月31日までの期間で実施し、センター係長　廣瀬常雄、技師　磯崎　寛、同嘱託　山本　健が担当した。
4. 本報告書の編集、執筆は磯崎が担当した。
5. 本書で遺構に使用した略号は、下記のとおりである。
S D (溝状遺構) S K (土坑)
6. 挿図の一部に国土地理院発行の25,000分の1地形図「普通寺」を使用した。

本文目次

第一章 はじめに

1 調査に至る経過.....	1
2 立地と環境.....	1
3 調査の方法と経過.....	3

第二章 調査結果

1 基本土層序.....	5
2 遺構の概要.....	5
3 遺構と遺物.....	6
(1) 遺構.....	6
① 弥生時代の遺構.....	6
② 中世の遺構.....	7
③ 近世の遺構.....	7
④ 時期不明遺構.....	8
⑤ 遺構のまとめ.....	9
(2) 遺物.....	10
① 石器.....	10
② 弥生土器.....	10
③ 中・近世土器.....	12
④ その他の遺物.....	13

第三章 まとめにかえて.....

遺構観察表の見方.....	16
---------------	----

挿 図 目 次

第1図 周辺地域の遺跡	2	第10図 A-1 SK05 実測図	8
第2図 調査区設定図	4・5	第11図 B-2 SK12 実測図	8
第3図 基本土層序模式図	5	第12図 A-1 SK04 実測図	9
第4図 遺構配置図	6・7	第13図 A-1 SK07 実測図	9
第5図 B-2 SD16・17 土層実測図	6	第14図 出土遺物実測図	11
第6図 B-1 SD13 土層実測図	6	第15図 出土遺物実測図	13
第7図 A-1 SD09 土層実測図	7	第16図 出土遺物実測図	14
第8図 B-4 SK17 実測図	7	第17図 遺構観察表	17
第9図 A-1 SK02 実測図	8		

図 版 目 次

図版 1 - 1	航空写真	図版 9 - 1	A - 1 S K04 (西から)
- 2	発掘調査前	- 2	A - 1 S K05 (東から)
図版 2 - 1	A - 1 (北から)	図版 10 - 1	B - 2 S K12 (西から)
- 2	A - 1 (南から)	- 2	B - 2 S K12断面(東から)
図版 3 - 1	B - 1 (南から)	図版 11 - 1	A - 1 S K07 (北から)
- 2	B - 2 (南から)	- 2	B - 4 S K17 (西から)
図版 4 - 1	B - 3 (南から)	図版 12 - 1	出土石器
- 2	B - 3・4 (東から)	- 2	A - 1 S K05出土遺物
図版 5 - 1	B - 4 (南から)	- 3	B - 3 S D19出土遺物
- 2	B - 5 (南から)	- 4	B - 4 S K17出土遺物
図版 6 - 1	B - 6 (南から)	図版 13 - 5	B - 4 S D23出土遺物
- 2	C - 1 (南から)	- 6	B - 4 S D23出土遺物
図版 7 - 1	A - 1 S D09断面(東から)	- 7	B - 4 S D23出土遺物
- 2	A - 1 S K03 (南から)	- 8	B - 4 S D22出土遺物(表)
図版 8 - 1	A - 1 S K02 (東から)	- 9	B - 4 S D22出土遺物(裏)
- 2	A - 1 S K02断面(東から)	- 10	A - 1 S K02出土遺物

第一章 はじめに

1. 調査の経緯

香川県教育委員会では、香川県善通寺市稻木町や金蔵寺町で、四国横断自動車道（善通寺～豊浜間）建設にともなって埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。その結果、微高地上に埋蔵文化財包蔵地が広く分布することを確認してきた。

一方、善通寺市与北町に一般国道319号善通寺バイパスの建設が計画されたが、香川県教育委員会では、当該地の埋蔵文化財包蔵状況を正確に把握するため、試掘調査を実施した。

試掘調査は、昭和62年1月に昭和61年度国庫補助事業の一環として実施しているが、その結果、近世を中心とする埋蔵文化財の包蔵地を確認した。香川県教育委員会では、建設者・文化庁と協議し、発掘調査を実施することを決め、発掘調査の実施を讐香川県埋蔵文化財調査センターに委託した。

香川県埋蔵文化財調査センターでは、昭和63年7月1日～昭和63年8月31日の期間で発掘調査を実施した。

2. 立地と環境

当遺跡の立地する善通寺市は、丸亀平野の西方に位置する。この丸亀平野は土器川・金倉川・弘田川によって形成された緩扇状地と沖積平野からなり、その西方から南方にかけて山並が取り囲んでいる。

京免遺跡(37)は、四国横断自動車道の善通寺インターチェンジ南方、金倉川西岸の緩扇状地上に位置する。標高は約24m～27mをはかる。周辺は、現在市街地より少し離れたのどかな水田地帯である。(第1図)

善通寺市には、古くから数多くの遺跡が分布することが知られていたが、四国横断自動車道（善通寺～豊浜間）の建設工事にともなう調査など、近年の発掘調査によってさらに多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺物を出土した遺跡は、金蔵寺下所遺跡(34)・矢ノ塚遺跡などがあげられる。いずれもナイフ型石器を出土している。これらの遺物は周辺に旧石器時代の明確な遺跡が所在することをうかがわせるものである。

縄文時代の遺跡としては、明確な遺構は確認されていないものの自然河川などから縄文土器を多量に出土した永井遺跡(1)があり、また五条遺跡(4)・稻木遺跡(3)・乾遺跡(5)・金蔵寺下所遺跡(34)などからも縄文土器片が出土している。

弥生時代になると遺跡数は増大する。三井遺跡(2)・五条遺跡(4)・甲山遺跡(6)などでは、弥生時代前期の土器が多数出土している。乾遺跡(5)では、自然河川から壺・ミニチュア土器・木製歛



- | | | | |
|---------------------|--------------|-----------|--------------|
| 1 水井遺跡 | 10 甲山シスト群 | 19 北原古墳 | 29 谷田古墳 |
| 2 三井遺跡 | 11 旧練兵場遺跡 | 20 菊塚古墳 | 30 経塚古墳 |
| 3 稲木遺跡(A地区) | (仙遊地区) | 21 王墓山古墳 | 31 槐賀塚古墳 |
| 4 五条遺跡 | 12 我拝師山(A地区) | 22 丸山古墳 | 32 宮ヶ尾古墳 |
| 5 乾遺跡 | 13 我拝師山(B地区) | 23 鶴ヶ峰4号墳 | 33 稲木遺跡(B地区) |
| 6 甲山遺跡 | 14 我拝師山(B地区) | 24 鶴ヶ峰古墳群 | 34 金藏寺下所遺跡 |
| 7 旧練兵場遺跡 | 15 山の谷遺跡 | 25 磨臼山古墳 | 35 上一坊遺跡 |
| 8 旧練兵場遺跡
(彼ノ宗地区) | 16 瓦谷遺跡 | 26 野田院古墳 | 36 中村遺跡 |
| 9 稲木遺跡(C地区) | 17 陣山遺跡 | 27 丸山2号墳 | *37 京免遺跡 |
| | 18 豊井神社古墳 | 28 丸山1号墳 | |

第1図 周辺地域の遺跡

の未製品が出土している。

また弥生時代中期の遺跡は、竪穴住居・甕棺墓を多数検出した彼ノ宗遺跡(8)、竪穴住居や鳥型木製品・銅剣形土製品を検出した矢ノ塚遺跡などがあり、両遺跡とも分銅形土製品・ミニチュア土器などが出土している。

弥生時代後期には竪穴住居や土塙墓、甕棺墓、集石墓と考えられる遺構等を検出した稻木遺跡C地区(9)、人面線刻が施された箱式石棺が検出された仙遊遺跡(11)などがある。

また、陣山遺跡(17)では平形銅剣、瓦谷遺跡(15・16)では平形銅劍・中細形銅劍・中細形銅鉢、我拝師山遺跡(12・13・14)では平形銅劍・銅鐸が出土しており、弥生時代の青銅器を多量に出土する地域としても知られている。

普通寺市内には、400基以上の古墳が所在する。市南西部に位置する標高616mの大麻山山塊には積石塚古墳が分布し、讚岐における積石塚分布圏の西限の位置を占めている。大麻山梶賀塚古墳(31)、経塚古墳(30)、丸山1号墳(27)、野田院古墳(26)などがそれにあたり、いずれも中規模の前方後円墳である。

また、王墓山古墳(21)、丸山古墳(22)、鶴ヶ峰4号墳(23)、遠藤塚古墳(25)、宮ヶ尾古墳(32)、それに前記した野田院古墳は、「有岡古墳群」として国史跡の指定をうけている。

奈良時代の遺跡としては、稻木遺跡B地区(33)・金蔵寺下所遺跡(34)などがあり、掘立柱建物跡が密集して検出されている。

現在、丸龜平野には条里制の痕跡と考えられているN30°Wの主軸方向を持つ方格地割が認められ、京免遺跡周辺の地割もこれにほぼ準じている。

参考文献

- (1) 「普通寺市史 第一巻」 普通寺市 1977年7月
- (2) 「県道西白方普通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」普通寺市 香川県教育委員会 昭和61年3月
- (3) 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊 中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡」香川県教育委員会 日本道路公团 1987年3月

3. 調査の方法と経過

調査区は、北に向かって西に約30° 振って細長く延び、その地形と試掘調査の結果から、大きく3地区に分け、北からA・B・C区とした。そのうち遺構が密なB区では幅約10m、遺構がやや希薄と判断されたA・C区では幅約5mの調査区を設定した。また、地形上の制約からB区では6地区、C区では2地区に分けて調査を実施した。(第2図)

実測の基準となる杭は、A区については建設省が設置したセンター杭No111を振り出し点として、同No115を見通して西方に90° 振り出し、9mの地点に打設した。B・C区については、同No120

を振り出し点にし、E Cを見通して南方0.2mに打設した。A区とB・C区では基準杭の方向が異なり、A区では約N25°W、B・C区では約N28°Wが主軸方向となる。

調査期間は、7月1日の調査開始から、8月末の埋め戻しまで、ほぼ2ヶ月を要した。調査手順としては、表土を重機で掘り下げ、その後を人力による精査を行った。時期的に水田への水入れと、例年ない降水とで調査区内の水抜きと現状回復とに手間取り、水にたたられた調査であった。

以下、調査日誌抄を掲げる。

調査日誌抄

6月

- 30日 調査用具搬入。プレハブ設置完了。
1日 作業員雇用開始。B-1より調査にかかる。
4日 B-1水抜き現状回復。
7日 B-1完掘。B-2調査開始。大溝S D
16の埋土が堅く掘抜きに時間がかかる。
12日 B-2完掘。A-1表土剥ぎ。
13日 工程上、A区の調査にかかる。
14日 降雨のため、作業休み。
15日 降雨のため、午後作業休み。
16日 杭打ち開始。
19日 杭打ち完了。A-1水抜き。
25日 作業員B-3へ移動。
29日 B-3完掘。

8月

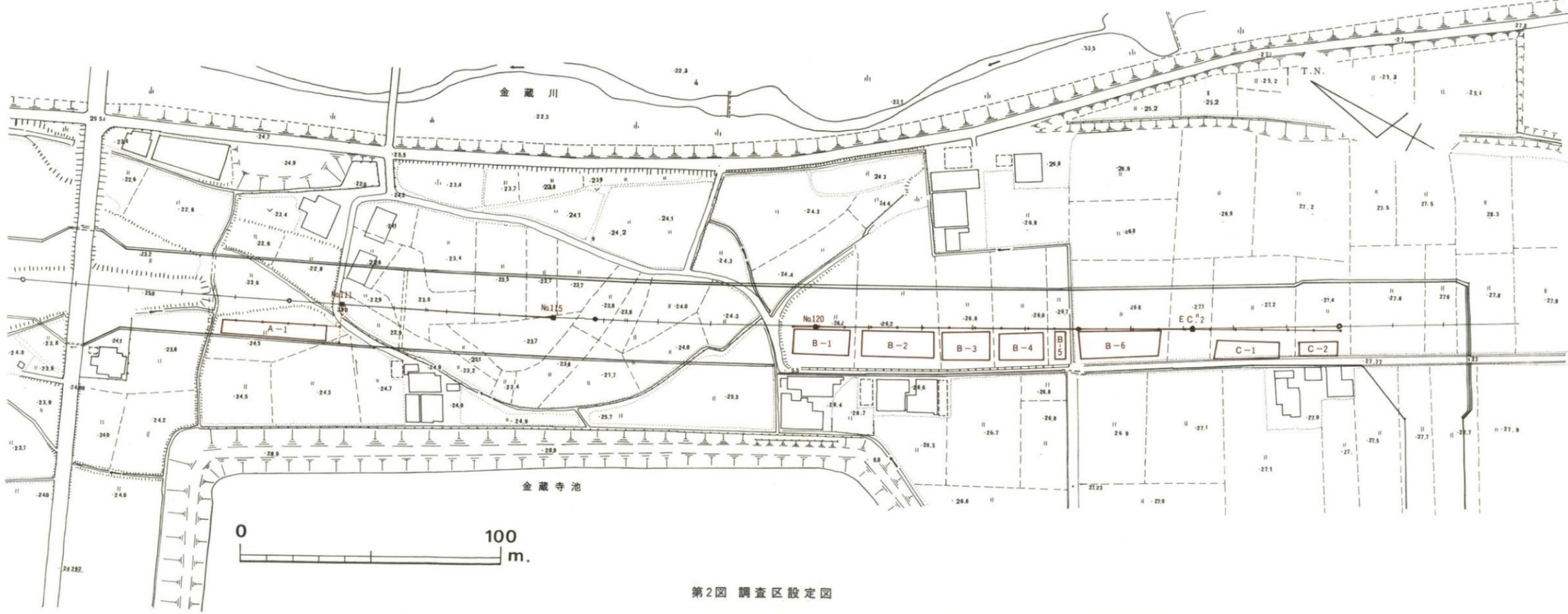
- 3日 A-1調査完了。B-4調査開始。
6日 B-1終了。
9日 B-4・5完掘。
10日 B-6調査開始。
12日 C-1調査開始。終了。
13日 B-2・3終了。
16日 B-5終了。
20日 B-4終了。
22日 B-6終了。
23日 A-1引渡。教育長現場視察。
C-2調査開始。
26日 C-2終了。発掘用具搬出。
27日 埋め戻しを行い京急遺跡の調査を終了する。

(調査・整理・報告書作成協力者)

稻田 美穂子 北山 健一郎 日下 弥生 蔵本 晋司
西岡 達哉 藤川 京子 森 格也 吉原 明美

(発掘調査作業員)

寶庭 澄夫 池田 敬子 杉崎 春子 竹内 文雄
大西 文 真室 静枝 松原 忠俊 岡崎 愛子
山崎 美智子 浅尾 静代 金崎 アヤコ 横田 キミ

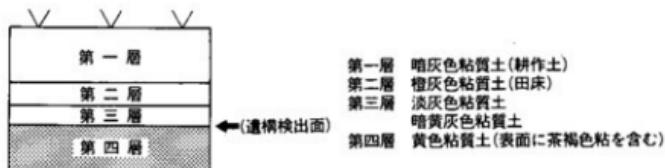


第2図 調査区設定図

第二章 調査結果

1. 基本土層序

調査区は、標高24m～27mの間に位置し、北端と南端では400mの隔たりがある。耕作土から地山までの土層序は、厚みに幅はあるものの、基本的な堆積は同一である。(第3図)



第3図 基本土層序模式図

第三層は堆積しない部分や、位置によっていくらかの土色の差異は認められるが基本的には同一の土層であると考えられる。

遺構は基本的に、第四層上面（遺構検出面）から掘り込まれているが、B-3・4で見られる一部の溝状遺構・土坑などは第二・三層上面から掘り込まれていた。

また、C-1については、調査着手時に耕作土が除去されており、遺構面が露出していた。

2. 遺構の概要

番号をつけた遺構は、溝状遺構37、土坑29になるが、そのうち遺物が出土した遺構は、溝状遺構14、土坑9である。顯著な遺構はB-2・3・4・5にまたがって検出した幅約6mをはかる溝状遺構やA-1などに見られた多くの石を包蔵する土坑、B-3・4で検出した屈曲する溝状遺構群、またそれに切られる形で検出された土坑などである。

地区ごとに見ると、A区ではSK02に見られるような近世の遺物を出土する遺構やSK09・SD09のように中世の遺物を出土する遺構がある。B区には、上層より石器を出土したSD16の他に明らかに人為的な屈曲をもつ溝状遺構群がB-3・4で検出され、溝内からは近世の遺物が出土している。B-6からC-1にかけては、調査区の西壁沿いに流れる幅20～40cmのまっすぐな溝状遺構が走っている。C-2では上面不定形の土坑群が検出された。(第4図)

3. 遺構と遺物

(1) 遺構

京免遺跡で検出した遺構は、溝状遺構と土坑・ピットである。特に、A-1からB-5にかけては濃密な遺構の分布を確認した。

検出した遺構は、出土した遺物から大きく三時期に分けられる。石鐵・石斧・弥生土器を出土する時期、輸入磁器を出土する時期、陶磁器を出土する時期である。

以下、各時期の遺構について記述する。

① 弥生時代の遺構

S D16 (B-2・3・4・5) (第5図)

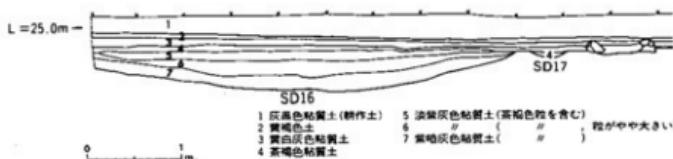
幅5~6m、深さ約0.4mの規模をはかる。B-4・5では溝の東肩のみを検出したが、B-3からB-2にかけては東方に彎曲しており、両側の肩を検出した。埋土は大きく4層に分かれ、いずれも堅緻にしまっている。B-3及びB-2から、サヌカイト製石斧が出土している。

S D17 (B-2・3) (第5図)

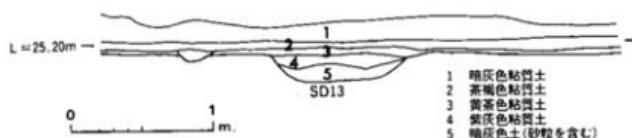
S D16に流れ込むような状態で検出した。幅約30cm、深さ約5cmをはかる。埋土はS D16の第1層と同じ暗茶褐色粘質土である。サヌカイト片が出土している。

S D13~15 (B-1・2) (第6図)

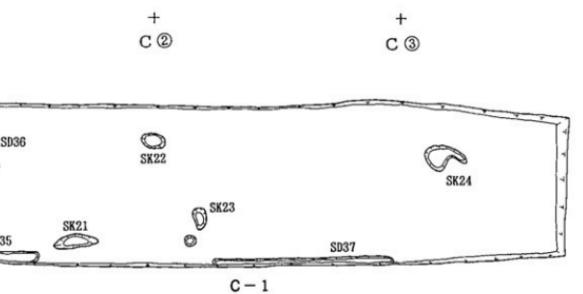
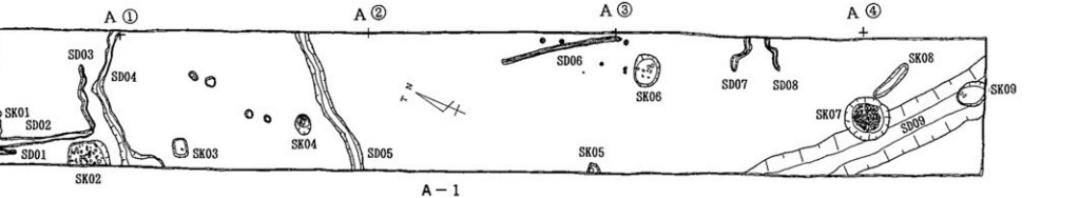
B-2では1条の溝状遺構であったS D13が、B-1では分岐し、北部ではさらに4条に分かれていた。埋土は、2層よりなり、第2層からは、石鐵・弥生土器片が出土した。



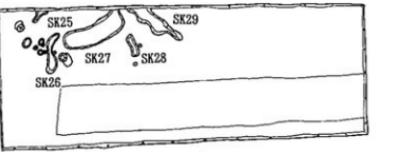
第5図 B-2 S D16・17土層実測図



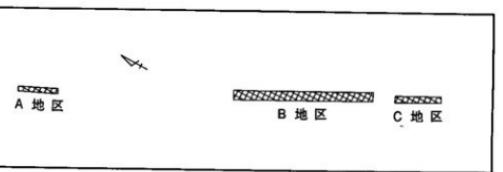
第6図 B-1 S D13土層実測図



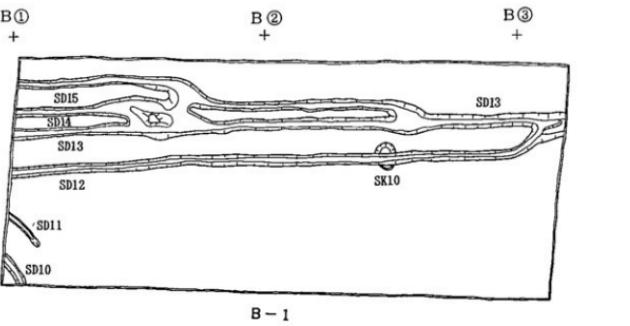
1



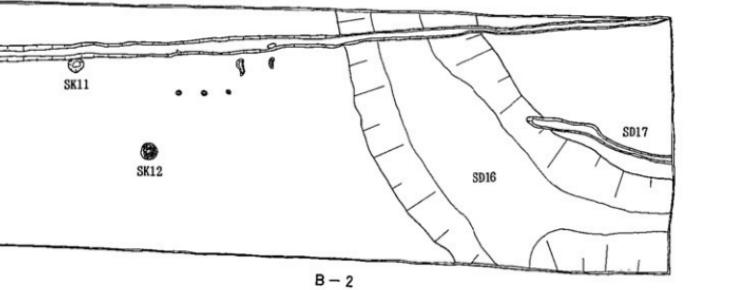
- 2



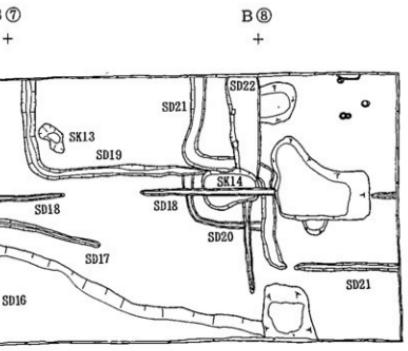
査区設定模式図



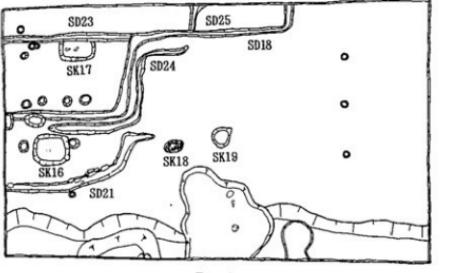
1



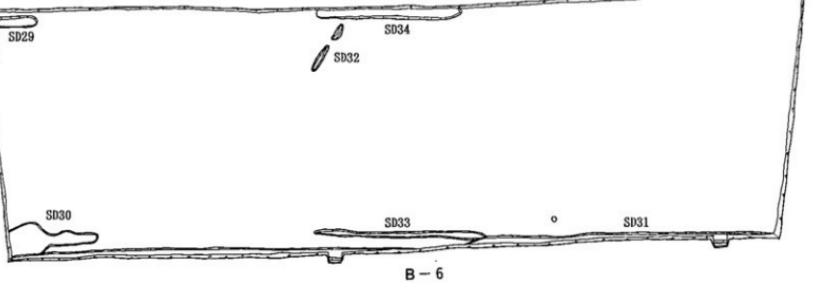
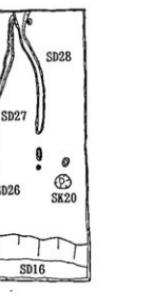
- 2



- 3



• 4



20

m

4図 遺構配置図

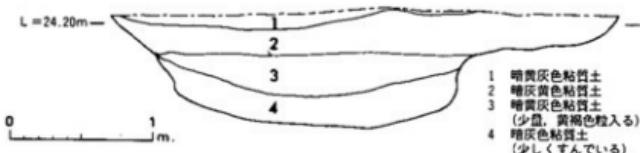
② 中世の遺構

S D09 (A-1) (第7図・図版7-1)

幅約1.5m、深さ約0.5mの規模をはかり、A-1の南部で検出した。埋土は地山に類似しており、黄灰色を呈していた。溝内から13世紀頃の青磁碗底部が出土している。

S K09 (A-1)

A-1の南壁沿いに検出した。上層は地山の灰黄色粘質土がまじっているが、下層の地山直上には暗灰色を呈する灰が堆積していた。土坑壁面が焼成を受けていないことから、灰を捨てた土坑と考えられる。土坑内第1層から土鍋か土釜の脚部が出土した。



第7図 A-1 S D09土層実測図

③ 近世の遺構

S K17 (B-4) (第8図・図版11-2)

S D23に切られた状態で検出した。土坑長径がS D23に平行している。上面形は隅丸方形で約1.5×1.2m、深さ0.4mをはかる。陶器・磁器・染付などが出土している。

S D23 (B-4)

S K17を切った状態で検出した。深さ約20cmと浅いものの、磁器・陶胎染付・灯明皿等が出土している。

S D19 (B-3)

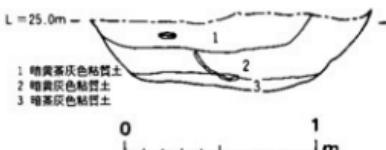
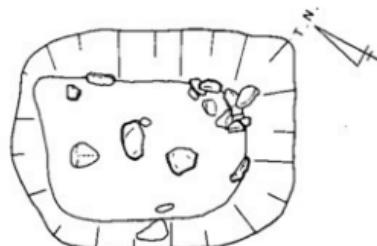
屈曲した溝で、遺物として三猿形土製品を出土している。

S K02 (A-1) (第9図・図版8)

幅約1m、深さ0.5mの規模をはかる。埋土は3層に分かれ、最下層には河原石がぎっしり詰まっており、石と共に陶器片・石臼が出土している。

S K05 (A-1) (第10図・図版9-2)

西壁沿いに検出した。土坑内に位置する石



第8図 B-4 S K17実測図

の上に陶器が乗っており、特異な様相を呈する。

S K12 (B-2) (第11図・図版10)

直径約0.5m、深さ約0.3mをはかる。

土坑内には40cm大の河原石が詰まっていた。埋土は均質な白灰色粘質土であり、その事より近世ごろの土坑と考えられる。

S K01 (A-1)

A-1の北端部で検出した土坑で検出面から1mをはかる。埋土は擾乱ブロックよりなる人工堆積である。土坑内最下層より磁器片が出土した。

④ 時期不明遺構

S D04・05・07・08 (A-1)

これらの遺構は出土遺物がないため、時期の特定ができないものの、埋土は堅緻にしまっており、また暗紫灰色を呈することより、時期的に古いものと考えられる。

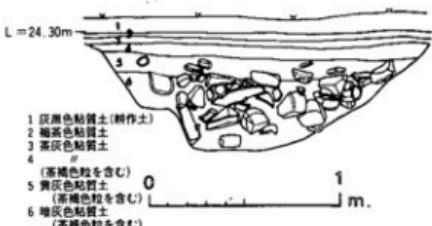
S D04・07・08については、断面形が不定形など流路の方向性が弱いことから自然の流路の可能性が考えられる。

S K04 (A-1) (第12図・図版9-1)

上面形は、長径80cm、短径60cmと歪んでおり、深さ約30cmの土坑で、埋土は暗黄灰色の粘質土からなる。上方に30cm~5cm大の河原石を伴う。

S K07 (A-1) (第13図・図版11-1)

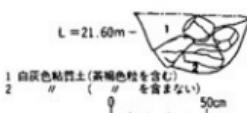
S D09を切った状態で検出した。遺物は出土していないが、土坑内第2層から拳大から人頭大の河原石が出土した。埋土は擾乱状の人工堆積であり、ブロック状の粘質土塊が含まれる。



第9図 A-1 SK02実測図



第10図 A-1 SK05実測図

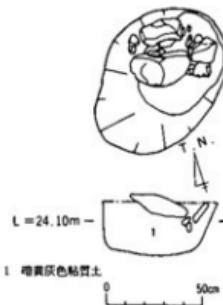


第11図 B-2 SK12実測図

SK08 (A-1)・SK10 (B-1)

SK11 (B-2)・SK21~29 (C-1・2)

これらの土坑は、平面形、断面形いずれも明確には把握できないものである。しかしながら、土坑内埋土は、地山である黄灰色を基本とした粘質土に暗灰色の粘質土がシミ状に入り混じったものであった。不明確ではあるが、土坑として考えておきたい。

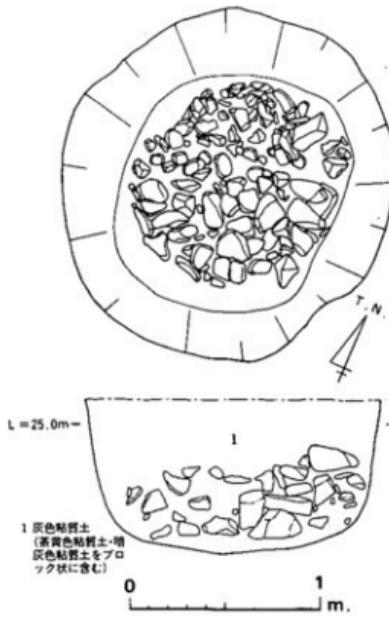


第12図 A-1 SK04実測図

⑤ 遺構のまとめ

京免遺跡で検出した遺構の時期的な分布を考えると、弥生時代の遺構はB-1・2を中心としてB-3・4・5の谷筋に位置している。これらを検出した地山の微地形から見ると、遺構の位置する地形は、緩やかな谷、もしくは緩やかな傾斜部である。そのことより、比較的古い遺物を出土する遺構を検出したところは、後世の削平を受けた度合が少なかったと考えができる。本来、遺構は今回検出した以上の広がりを占めていたのであろう。

また、近世の遺構はB-3・4で検出した。確認している屈曲した溝状遺構は何らかの遺構を囲んでいたと考えられよう。また、A-1で検出した土坑などから当該地の付近にも近世の遺構の広がりが考えられる。さらに、B-5・6・7で見られたように、検出した溝状遺構が現在の農業用水路に平行して所在することから、水田耕作に伴う溝状遺構と考えられる。これらの溝と条里制との関わりを考えると、まず現地



第13図 A-1 SK07実測図

割は旧条里にほぼ平行しているが、地割の正確さ等からみて後世のものであると考えた方が妥当である。

今回検出した溝状遺構は、旧条里の推定線とほぼ平行ではあるが、出土した遺物の絶対量が少なく、遺構の時期が明確でないことから、これらの溝状遺構が旧条里に伴う溝と断定するには至らなかった。

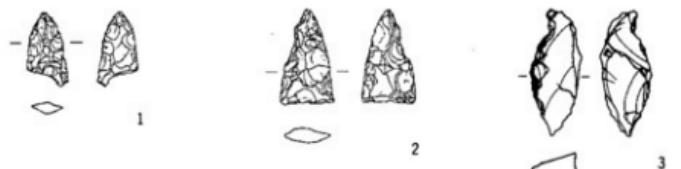
(2) 遺 物

① 石 器 (第14図・図版12-1)

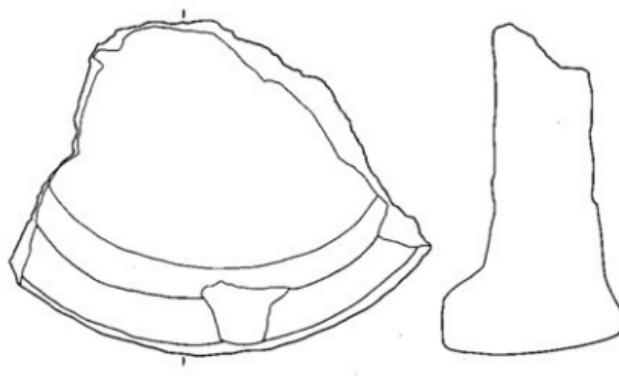
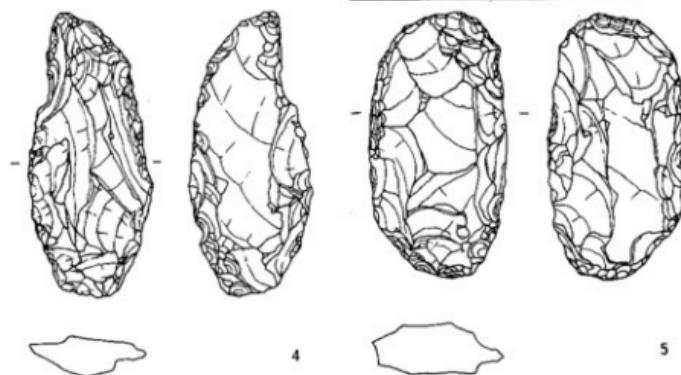
- 1 SD13 (B-1) の最下層から出土した。サヌカイト製の石鎌で表面の風化が著しい。形は凹基であるが基部端は欠損している。
- 2 SK17 (B-4) から出土した。サヌカイト製の石鎌である。平基の石鎌であり、斜辺部の片方は滑らかに仕上がっているが、もう一方の斜辺部にはやや大きな剥離があり、その上からさらに細かい調整が加えられている。
- 3 A-1 第3層、地山直上出土。不明石器であるが、くびれ部があり縁辺部には細かい調整が施されているため、石器の一部が剥離したものと思われる。
- 4 SD16 (B-2) から出土した。サヌカイト製の石斧で、表面は風化が著しく白色を呈している。長さ97mm・幅42mm・厚さ17mmをはかり、縁辺には細かい調整が施されている。
- 5 SD16 (B-3) から出土した。サヌカイト製の石斧で、表面の風化が目だつ。厚さ17mm・長さ87mm・幅45mmを測り、粗い調整を縁辺に施している。装着時の使用痕と思われる磨滅が部分的にみられる。
- 6 SK02 (A-1) から河原石と共に出土した。凝灰岩製の上臼。溝はない。側面には形成時の調整がみられ、また把手の取り付け穴が観察できる。上面外縁部には約1.5mmの高まりが、また下面外縁部にも約5mmの高まりがみられる。下面には使用による同心円状の削痕と磨滅がみられる。石材の質は灰白色の凝灰岩で灰質に軽石・ガラス質の安山岩・花崗岩等の小礫が混じる。共伴遺物より江戸時代以降の遺物と推定される。

② 弥生土器 (第15図)

- 7 SD13 (B-1) から出土した。弥生土器の底部である。周辺が磨滅している。内輪気味に立ち上がる。



0 10cm

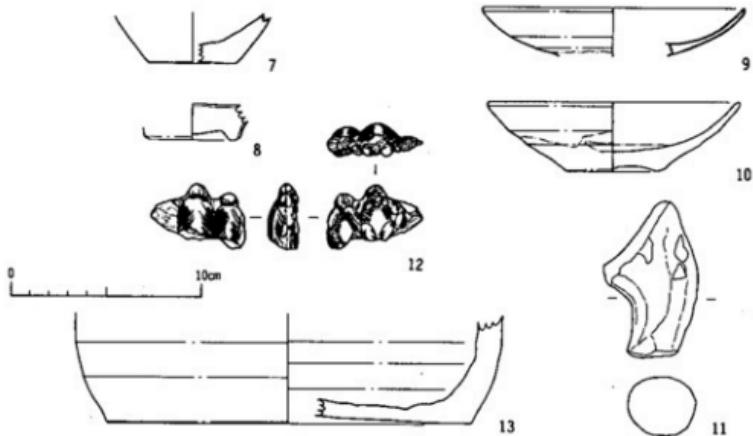


0 10cm

第14図 出土遺物実測図

③ 中・近世土器 (第15・16図・図版12-2~4・13)

- 8 SD09 (A-1) から出土した青磁碗底部である。胎土は白灰色で表面に施された釉薬は白緑青色で高台疊付け部と高台内面は無釉。また高台底部は二面からなり稜を持つ。13世紀頃のものと思われる。
- 9 SK02 (A-1) から石臼に伴って出土した陶器の皿。表面は、淡灰緑色の釉を施しており、胎土は、白灰色。体部外面下方と上方の一部には、釉は施されていない。
- 10 SK05 (A-1) から出土した。内面の見込み部に砂目積みが見られる。内面外面とも上部は黄灰白色を呈するが、部分的に淡い自然釉がみられる。内面の見込み部には渦状のかきとり痕がある。外面の中程から底部にかけては無釉で燈黃白色の胎土地が見える。17世紀前半の唐津焼の陶器皿であろうと思われる。
- 11 SK09 (A-1) から出土した。第1層出土で土鍋か土釜の脚部である。胎土は白黄灰色で、砂粒を多く含む。
- 12 SD19 (B-3) から出土した。三猿形土製品である。三猿のうち、聞か猿と足部が欠損している。江戸時代のものであろう。
- 13 SD22 (B-3) から出土した。備前焼の壺か甕の底部。体部の器壁は1~2cmと厚く表面は暗褐青色から暗褐茶色で、断面は灰白色を呈している。
- 14 SK17 (B-4) から出土した。備前焼の摺鉢の底部である。
- 15 SK17 (B-4) から出土した。内面は無釉である。唐津焼陶胎染付の香炉である。体部外面のみに施された釉は青白色で吾須は暗青色。胎土は茶黄灰白色である。高台は大きくしっかりとしている。
- 16 SK17 (B-4) から出土した。唐津焼の陶胎染付椀である。疊付け部を除いて全体に青白色の釉がかかり、吾須の発色は淡暗緑青色である。高台は唐津焼特有の三日月高台で、疊付け面の幅が偏っている。胎土は灰黒色で堅いが、やや粗い。
- 17 SK17 (B-4) から出土した。土師質土器の体部上部から口縁部にかけて残る甕で11とは同じ胎土である。口縁端部はつまみ出され稜を持つ。口縁上面には広い面を持ち、一ヶ所は注ぎ口状に緩やかな凹みがある。
- 18 SK17 (B-4) から出土した。土師質の甕である。高さ20cm、口縁部の径22cmを残す。底部から内彎しながら緩やかに立ち上がる。内外面には指頭痕が残り、内面見込み部にはヘラによるなで調整の痕が見られる。口縁端部は、つまみ出しによって内側に肥厚し、丸くおさめている。また、口縁の最上部は平坦に作られている。
- 19 SD22 (B-4) から出土した。土師質土器の底部。胎土は細かく灰燈色。高台部は片方に磨滅が偏り、人工的な磨滅と思われる。見込み部は白色の着色が残る。

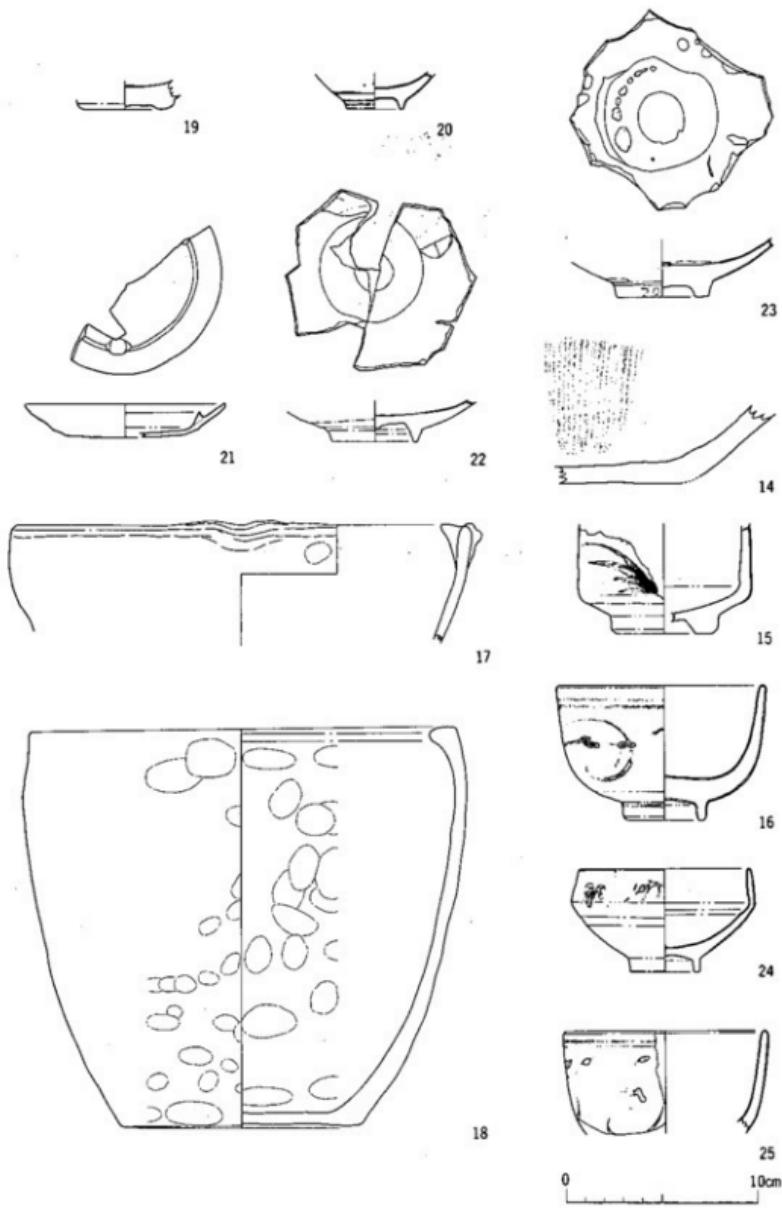


第15図 出土遺物実測図

- 20 S D23 (B-4) 出土の染付磁器。内・外とも釉が施されており、底部と高台外面には、淡紺色の圓線を描く。
- 21 S D23 (B-4) から出土した。備前焼の灯明皿下半部。光沢のある褐茶色で内面の境に切れ込みがある。
- 22 S D23 (B-4) から出土した。蛇の目釉剥ぎされた唐津焼の皿。淡緑灰色の釉がかかるが釉剥ぎされた部分と底部周辺は釉がかからず赤燈灰色の地肌が見える。胎土は灰白色、高台は逆三角形。
- 23 S D23 (B-4) から出土した。蛇の目釉剥ぎの施された磁器の皿。釉薬は淡青色。高台、釉剥ぎ部分に砂目積みの痕が残る。
- 24 S D23 (B-4) から出土した。唐津焼の陶二彩椀。釉薬の色は淡緑黄灰色、黒茶色の模様が入る。高台は無釉。胎土は淡黄灰色。体部は、まっすぐに下に降りる高台から外傾し、上方で棱を作り、緩やかに内傾する。
- 25 S D23 (B-4) から出土した。唐津焼の陶胎染付。吾須の発色は淡暗青色。体部のみであるが13と器形は同じと思われる。17世紀後半から18世紀中頃と思われる。

④ その他の遺物 (B-3・4)

攢乱土からの遺物は、17世紀後半から19世紀前半の遺物が出土した。特に、18世紀前後の遺物が多く、中でも唐津焼の蛇の目釉剥ぎを施した皿が3点、瀬戸・美濃焼の掛け分け椀が出土している。B-3・4の溝や土坑とほぼ同じ時期の攢乱と思われる。



第16図 出土遺物実測図

第三章 まとめにかえて

当遺跡は航空写真（図版1-1）に見られるように金蔵寺池東方に位置する。金倉川と河川跡にはさまれた微高地上に位置する。地形区分の上からは緩扇状地に位置し、南から北へ緩やかに下る地形を呈している。また微地形ではB-3～5は緩やかに西方に傾斜している。当遺跡の遺構検出面では、黄色粘質土が確認され洪積台地状の安定した地盤が確認された。

調査結果を北から地区ごとに眺めてみると、A区は13世紀と思われる青磁碗底部を出土したSD09を一番古い時期とし、17世紀頃と思われる椀を出土したSK05、集石土坑などが目につく。B-1からは石鏃、弥生土器を出土したSD13、B-2・3からは石斧を出土し、浅いが幅6mに及びB地区西壁側を流れる溝状遺構SD16、B-3・4からは近世遺物を出土したSK17、それを切るSD23、周辺には屈曲した近世溝が存在する。B-6地区南部からC-1地区には幅40cm程度の地割に沿った溝が検出された。C-2にはしみ状の埋土を持つ土坑が多数検出された。

今回の調査で近世陶磁器が出土したが、近世遺物は主に高松城東の丸跡、上一坊遺跡等からの調査報告を参考にし時期を推し量った。B-3・4から出土した近世遺物は溝の屈曲などから何らかの施設があったことが考えられた。当遺跡としてはまとまった遺構群である。

普通寺の条里線はN30°Wと言われており、N25°～35°Wでその傾きをもつ溝はSD06・12・13・14・15・18・29・30・31・33・34・35・37である。これらの溝からは条里制施行以後の時期を示す遺物の出土はなく、残念ながらこれらの溝を条里に伴う溝と断定できない。

調査を終えて、全体の遺構検出状況から周辺に広がる遺構を考えるとA-1周辺には中・近世の遺構が、B-1～5周辺には弥生時代の遺構が、分布している可能性があると思われる。今回の調査で得られた事実はわずかなものであり、条里制や周辺に分布する遺跡との関わりを明確に示す遺構はなかった。今後の発掘調査による成果を期待するものである。

遺構観察表の見方

遺構観察表は、平面図、断面図だけでは分かりにくいこと、また本文中では取り扱っていない遺構などと共に、遺構を考える上で必要と思われるデータを記載したものである。

以下、各項目について説明する。

- ・遺構番号 溝及び溝状遺構は S D、土坑及び土坑状遺構は S Kで表す。
A-1 から C-2 まで通し番号を付けている。
- ・検出グリッド 遺構が検出された調査区
- ・幅 遺構の上面形での大きさを示し、土坑では長径・短径、溝では幅を表す。
- ・深さ 検出面から、土坑・溝の最深部までの深さ、代表値を表すが削平を受けた場合、末端部で深さ 0 cmになるが、最低限、溝と認識できるまでの深さである。
- ・上面形 遺構の検出されたプランで、土坑は、丸・隅丸方形・不定形、溝は直線・蛇行・屈曲等で表す。
- ・埋土 何層に分かれるか、またその埋土土層名。
- ・流路方向 溝が真北から何度、どちらの方向に延びるかを示す。
- ・比高 溝の傾斜を 5 m 単位で表す。溝の底に起伏があり、比高が確認し難いものについては、無記入。
- ・出土遺構 遺構からの出土遺物、実測図・写真があるものはその番号を記入している。

第17図 遺構観察表

遺構 番号	検出 ブリッジ	幅(cm)	深さ(cm)	上面形	埋 土	流路方向	比高	出土遺物	備 考
S D01 A-1		12~20	2~3	直	①白灰色粘質土	N23E			
S D02 A-1		18~36	2~5	直	①白灰色粘質土	N25E			
S D03 A-1		14~26	5~8	蛇 行	①白灰色粘質土		5		
S D04 A-1		20~40	27~46	細 曲	①淡紫灰色粘(褐色) ②〃(茶褐色)③〃(黄褐色)	N30E, N85E			源壁で3本に分岐
S D05 A-1		50	15~20'	ほぼ直 線	①暗灰紫色②〃(白)	N50E	9		
S D06 A-1		14~16	3~5	直 線	①黄灰色粘質土	N32W	15		
S D07 A-1		20	3~10	蛇 行	①淡紫灰色粘②〃(褐色)		30		
S D08 A-1		10~20	5	蛇 行	①淡紫灰色粘②〃(褐色)		15		
S D09 A-1		180	40	直 線	①暗黃灰色粘②暗灰黄色粘 ③暗黃灰色粘④暗灰色粘	N50W	10		
S D10 B-1		34~36	2~5	直 線	①暗紫灰色粘質土(茶褐色)	N25E			
S D11 B-1		20	1~5	直 線	①暗紫灰色粘質土(茶褐色)	N25E			S D10と平行
S D12 B-1		35~45	14~15	直 線	①淡紫灰色粘質土 ②暗紫灰色粘質土	N35, 30W	2	土器片	S D13と平行
S D13 B-1・2		35~50	14~16	直 線	①暗灰紫色粘質土 ②暗灰紫色粘質土	N30W	3	石器、土器片	
S D14 B-1		30~3	8~9	直 線	①暗紫灰色粘質土 ②暗紫灰色粘質土	N28W		サヌカイト片	S D13より分歧
S D15 B-1		32~40	5~14	直 線	①淡紫灰色粘質土	N27W			S D13より分歧
S D16 B-2-3-4-5	550~620	40	蛇 行	①新褐色粘質土 ②淡紫灰色粘質土 (茶褐色色)				石器、土器片、 サヌカイト	
S D17 B-2		22~40	2~4	ほぼ直 線	①茶褐色粘質土	N15W	10	サヌカイト片	
S D18 B-2-3-4		20~40	1~12	屈 曲	①暗灰紫色粘質土	N30W	6		S D17より1つ上の 土層より切り込ま
S D19 B-3		20~60	4~13	屈 曲	①暗灰紫色粘質土	N60E, N30W			
S D20 B-3		24~36	1~3	屈 曲	①暗灰紫色粘質土				
S D21 B-3-4		40~50	5~9	屈 曲	①暗灰紫色粘質土	N120W, N30W			
S D22 B-3		30~120	5~7	直 線	①暗灰紫色粘質土	N120W			
S D23 B-4		34~20	5~10	直 線	①暗黄灰白色粘質土	N37W	5	磁器、染付、要 遺物を多く含む	
S D24 B-4		22~44	5~9	屈 曲	①暗黄灰白色粘質土	N65E	10	土器底	
S D25 B-4		24	5	直 線	①暗黄灰白色粘質土	N110W			
S D26 B-5		20	10	直 線	①灰白色粘質土	N80E			
S D27 B-5		22~32	2~5	ほぼ直 線	①灰白色粘質土	N100W	3		
S D28 B-5		22~28	2~5	ほぼ直 線	①白灰色粘質土	N145W, N115			
S D29 B-6		30	2~12	直 線	①暗灰紫色粘質土	N30W	6		S D23に続く
S D30 B-6		36	1~3	不定 形	①暗灰紫色粘質土	N30W			
S D31 B-6		40	5~7	直 線	①暗灰紫色粘質土	N30W			
S D32 B-6		21	3	直 線	①暗灰紫色粘質土	N95E			

遺 墓 号	横出 グリッド	幅(cm)	深さ(cm)	上 面 形	埋 土	流 路 方 向	比 高	出土 遺 物	備 考
S D33	B - 6	30	2	直 線	①暗灰色粘質土	N26W			
S D34	B - 6	50	2~5	直 線	①暗灰色粘質土	N27W			
S D35	C - 1	26	2	直 線	①暗灰色粘質土	N28W			
S D36	C - 1	45	4	直 線	①暗灰色粘質土	N15E			
S D37	C - 1	24	2	直 線	①暗灰色粘質土	N30W			
S K01	A - 1	130	75	円	①暗灰色粘質土(褐色) ②暗褐色粘質土(褐色) ③灰白色粘質土			染付磁器片、 土器片	
S K02	A - 1	160~130	55	圓 丸 方 形	①暗灰色粘質土(褐色) ②暗褐色粘質土(褐色)、石 ③灰白色粘質土			振り鉢、石臼、 磁器、陶器	塊石を混ず
S K03	A - 1	56~74	10	圓 丸長方 形	①灰白色砂		石		
S K04	A - 1	60~80	30	長 円	①暗黃色粘質土		石		
S K05	A - 1	100~120	10	円	①暗灰色粘土(黄粒、石)				
S K07	A - 1	170	80	円	①灰白色粘質土 ②灰白色粘質土(褐色) ③石		骨磁	河原石を包含	
S K08	A - 1	40~180	20	直 線	①淡紫灰色粘質土(茶褐色)				
S K09	A - 1	100~120	35	円	①灰黄色②風灰色		土鏡石	石鏡じり	
S K10	B - 1	80~108	5	円	①淡紫白色				S D12に切られる
S K11	B - 2	50	26	円	①暗紫灰色粘質土				
S K12	B - 2	60	30	円	①白灰色粘質土 (茶褐色) ②石				10~20cmの石を多量 に含む
S K13	B - 3	60~130	27	不 定 形	①紫灰色粘質土				
S K14	B - 3	40	110	長 円 形	①暗黃灰色粘質土				
S K15	B - 4	66	8	半 長 円	①白灰色粘質土				
S K16	B - 4	65~150	37	圓 丸長方 形	①暗黃灰色粘質土				
S K17	B - 4	120~150	40	圓 丸長方 形	①暗黃灰色粘質土 ②暗黃灰色粘質土 ③暗黃灰色粘質土				
S K18	B - 4	50~76	4	長 円	①暗灰色粘質土		磁器、染付		
S K19	B - 4	36	10	円	①灰色砂				
S K20	B - 5	60	13	円	①暗紫灰色粘質土				
S K21	C - 1	60~185	24	長 円	①淡黃灰色粘質土				
S K22	C - 1	60~100	32	円	①淡黃灰色粘質土				
S K23	C - 1	45~96	6	不 定 形	①淡黃灰色粘質土				
S K24	C - 1	110~170	9	不 定 形	①淡黃灰色粘質土				
S K25	C - 2	50~60	14	不 定 形	①淡黃灰色粘質土				
S K26	C - 2	20~160	10	不 定 形	①淡黃灰色粘質土				
S K27	C - 2	80~250	7	不 定 形	①淡黃灰色粘質土				
S K28	C - 2	15~90	5	不 定 形	①淡黃灰色粘質土				
S K29	C - 2	45~200	20	不 定 形	①淡黃灰色粘質土				

図 版



(1) 航空写真

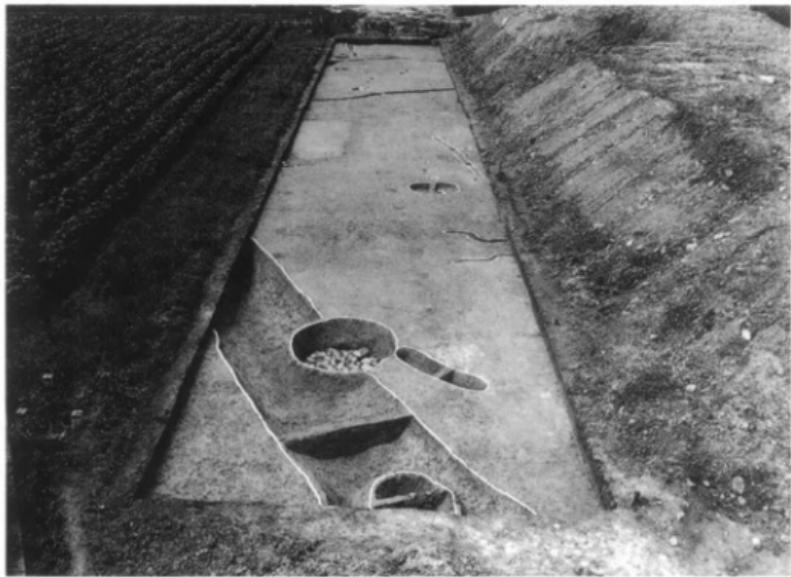


(2) 発掘調査前

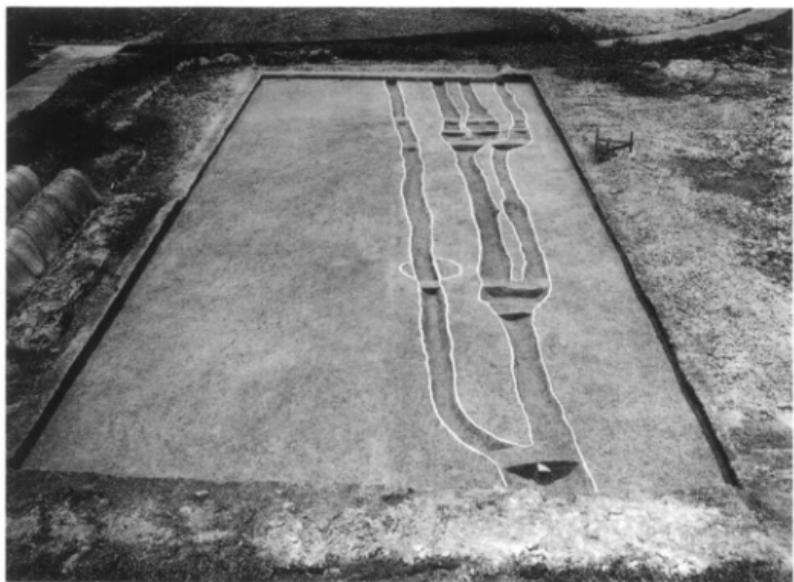
図版 2



(1) A-1 (北から)



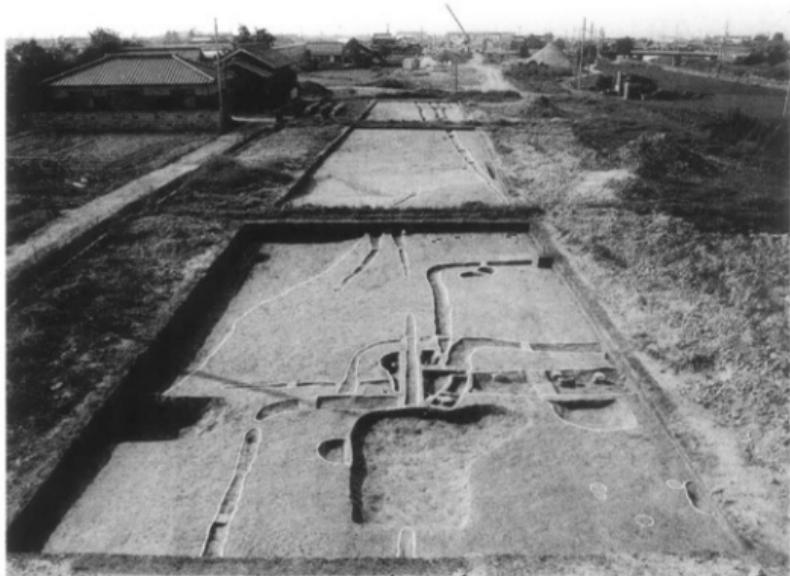
(2) A-1 (南から)



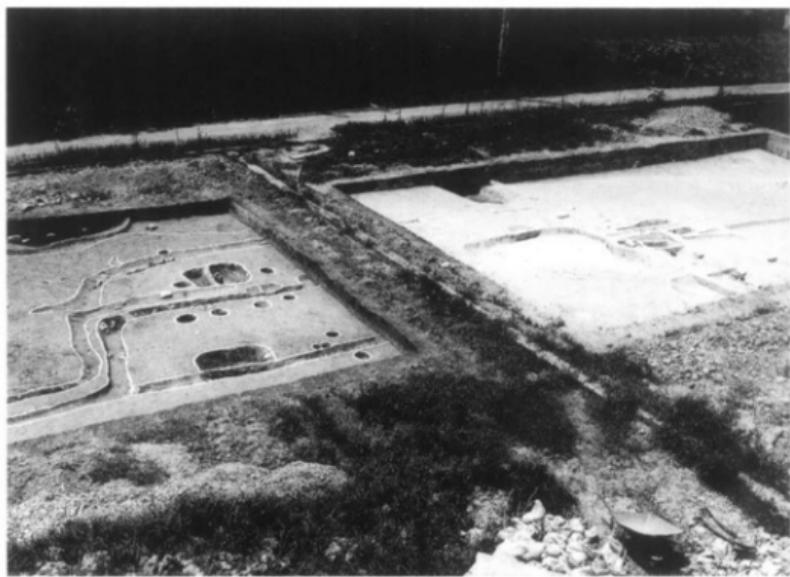
(1) B-1 (南から)



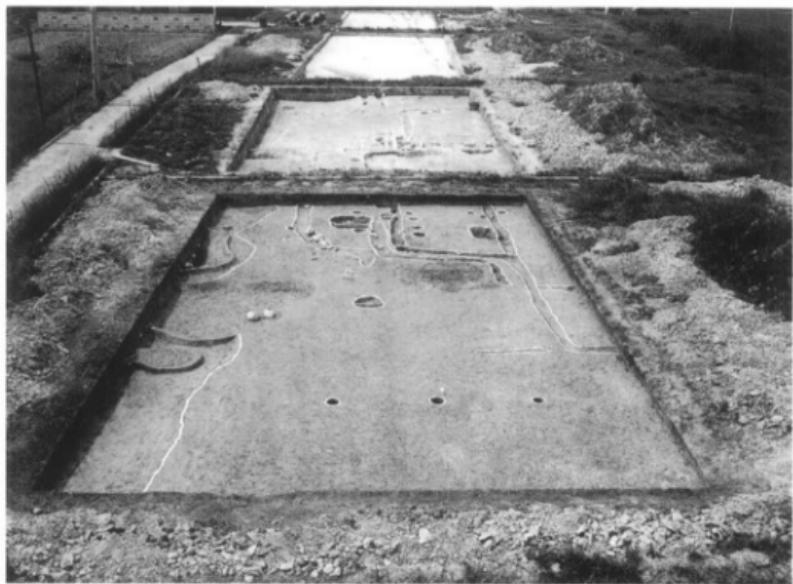
(2) B-2 (南から)



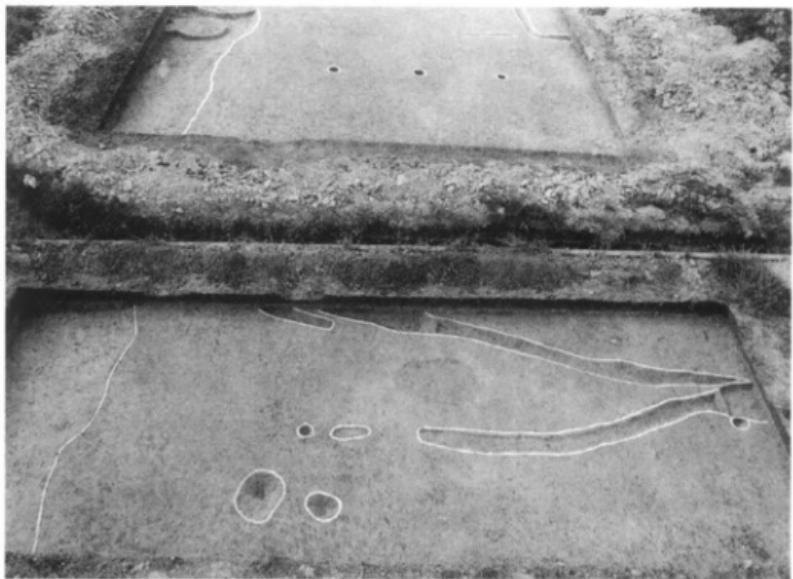
(1) B-3 (南から)



(2) B-3・4 (東から)



(1) B-4 (南から)



(2) B-5 (南から)



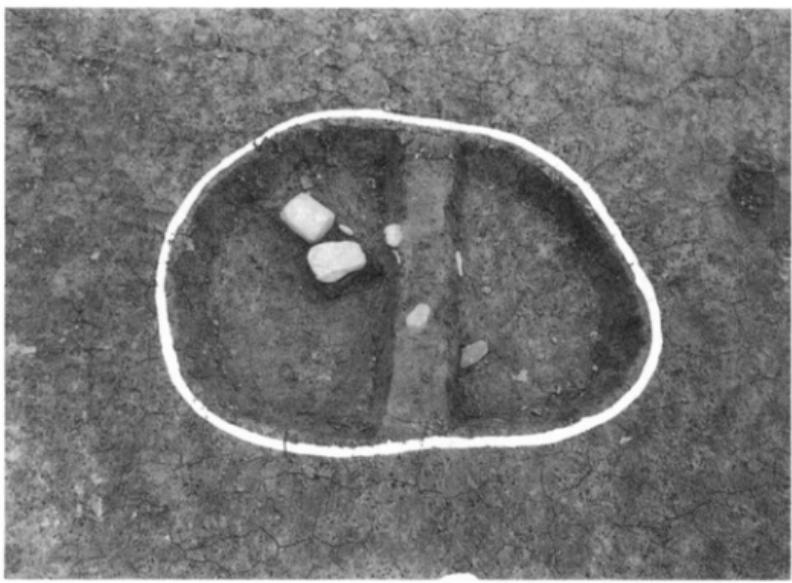
(1) B-6 (南から)



(2) C-1 (南から)



(1) A-1 SD09断面（東から）



(2) A-1 SK03（南から）



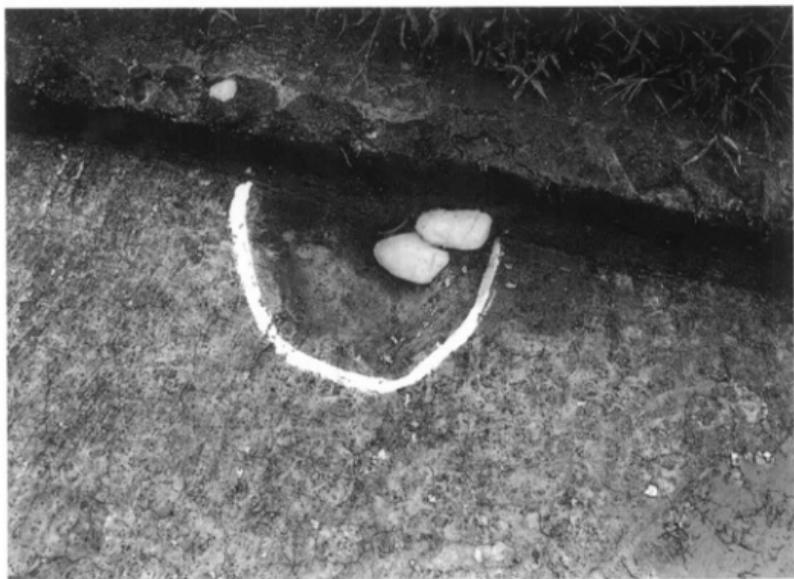
(1) A-1 SK02 (東から)



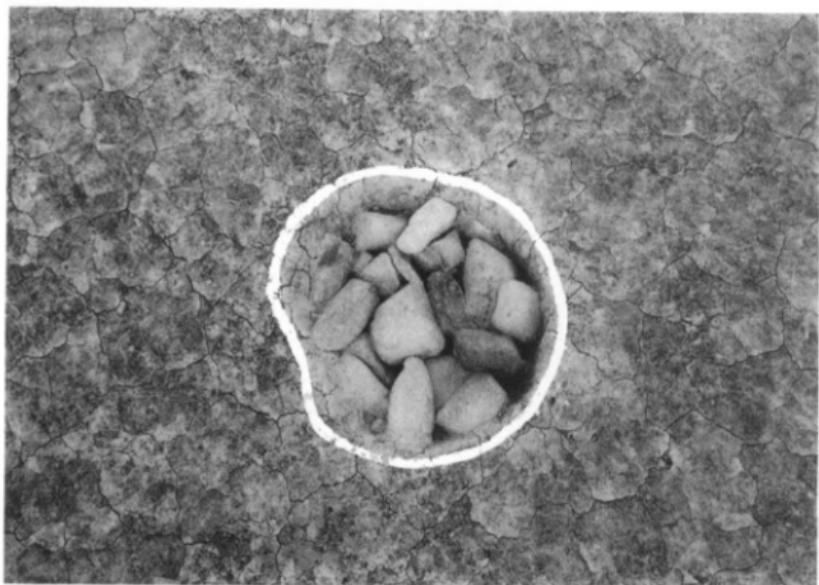
(2) A-1 SK02断面 (東から)



(1) A-1 SK04 (西から)



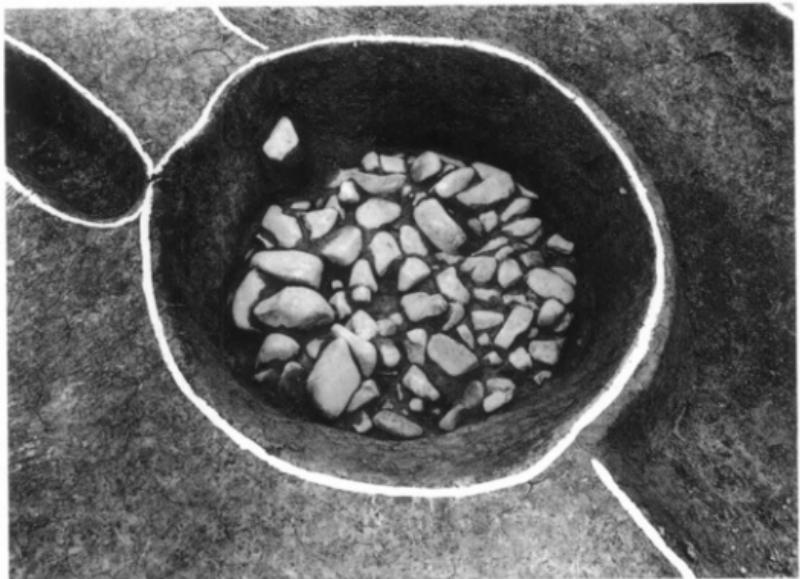
(2) A-1 SK05 (東から)



(1) B-2 SK12 (西から)



(2) B-2 SK12断面 (東から)



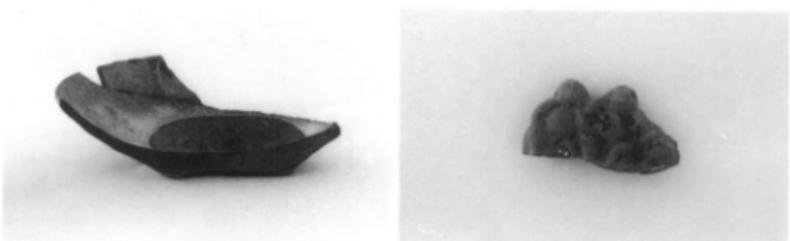
(1) A-1 SK07 (北から)



(2) B-4 SK17 (西から)



(1) 出土石器



(2) A-1 SK05出土遺物

(3) B-3 SD19出土遺物



(4) B-4 SK17出土遺物



(5) B-4 S D23出土遺物



(6) B-4 S D23出土遺物



(7) B-4 S D23出土遺物



(8) B-4 S D22出土遺物(表)



(9) 同 (裏)



(10) A-1 S K02出土遺物

一般国道319号善通寺バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

京免遺跡

昭和63年12月10日 発行

編集 香川県埋蔵文化財調査センター
坂出市府中町南谷5001
電話 (0878)48-2191

発行 香川県教育委員会
香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 常成光社

